

ブラジル

私にとって家族は一番大切な存在

——海を渡り、土地を買って、コーヒー農園を開いた——

話し手——白木 國義さん

聞き手——蘇鉄本 奎

聞いた日——二〇一六年八月二七日



探求心旺盛な幼少時代

白木國義です。一九一九年九月一九日生まれ、の九六歳です。福岡県の朝倉郡馬田村（現福岡県朝倉市）に住んでいました。ここは大刀洗飛行場が近くにあったところで、普通の日本の平地帯、自然地帯ですね。飛行場は山があるところにはできないからね。昔はね、部落がいくつか集まって村になっていたでしょ。そのなかで農業をして暮らしていました。今はどうか知らないけど、戦前の福岡は日本でも有数な県だったんです。その当時、福岡県には一〇の市がありました。一〇の市があった県は福岡県だけで、日本全国で他にどこにもなかったですね。私は小さい頃から淡々としていて、物事を深刻に捉えない性格でした。だから昔から落ち着いていて、やんちゃだったという事はなかったです。学校の学年末の終業式には、校長先生から素行善良と皆勤で表彰状をもらいましたね。初等科で義務教育を六年間受けて、高等科で

二年間勉強をしました。勉強は、好きっていうほどじゃなかったけど、していました。わからないことや知らないことを徹底的に調べ上げるまでは気が済まなかったですね。専門的なことではなく、基本的なことは全て知りたいと思いますね。運動はあんまり好きじゃなかったです。運動神経っていうものがなかったんです。学校を卒業してからブラジルに行くまでの八カ月間は、百姓の手伝いをしていました。

家族は両親と兄と私の四人です。父は、馬鹿正直というか、本当に将棋も指さない、博打はしないという人で、少しお酒に弱くてお酒に吞まれることはありましたけど、善良な人でしたね。そういうことで母が少し苦労したけど、まあ世間のどこにでもあることですね。母も父と同じような人で、優しくてまじめな人でしたね。兄は私と全く似ていなかったですね。やんちゃではなかったんだけど、社交的で誰とでも話をしたりして、明るい感じの人ですね。兄は私より歳は一つか二つ上だったけど、昔の日本のお芝居の話なんかも、とても詳しくかったですよ。

ブラジルへ希望をもって

移民としてなぜブラジルに行くことになったのかとい
いますと、ブラジルに行つて出稼ぎをするためですね。日
本は当時貧しくて、一つでも多くの食べる口を減らすた
めに、国策として移民を送り出していたんですね。そう
いう政策をすることで、日本のみんなの生活が少しは変
わるんじゃないかということで、日本は外国にどんどん
移民を送り出していたんですね。当時は満州への移民も
多かったですけど、私は満州には全く関心がなかった
です。満州に行くとなると、戦争のための武装移民つて
ことになるんですね。私はアマゾンに興味があったんで、
ブラジルは少し良いなと思っていました。兄が、ブラジ
ルに行くことに一番関心がありました。だけど父はあん
まり関心を持っていませんでしたね。反対していたつて
わけではないけど、賛成はしていませんでしたね。

日本を離れるさみしさや不安はあったけど、淡々とし

て深く考えたりしませんでした。お金を貯めたら日本に
帰るつもりだったので、当時は不安というよりは希望の
ほうがありましたね。

ハワイ丸乗船

私が住んでいたところから門司までは、鹿児島本線の
汽車でいきました。門司で降りて、そこから連絡船に乗っ
て一五分くらいで下関ですね。またそこから山陽線の大
阪まで行く夜行列車で、神戸教養所（神戸収容所）があ
る神戸三宮まで行きました。夜通し走つて一二時間近く
かかりましたね。

教養所には一週間いました。ここではブラジルに行く
ための予備知識を与えられましたね。健康診断とかも受
けたりしました。教養所にいる間で一番印象に残ってい
ることは、日本の武将で有名だった楠木正成のお墓を、遊
び半分で訪れたことですね。今上陛下の満一歳の誕生日
のお祝いが教養所であったのも、よく覚えていますね。

ブラジルに向かったときは一九三五年で、数え年で一七のときでした。私が乗った船はハワイ丸といひます。乗客は九〇四人いました。こういう長い航海では必ず死人が出るそうなんです。しかし私たちの航海では死者が一人も出ませんでした。逆に航海中に二人の赤ちゃんが産まれて、乗客は九〇六人に増えました。一二月二六日から二月二〇日まで、だいたい二カ月かかりましたが、事故もなく順調にブラジルに行くことができました。

ブラジルまでの長い航海

航海中は他の乗客と世間話をしたりしていました。神戸を出発してブラジルに着くまで、船の中でポルトガル語の講習なんかもありました。移民船には移民の人たちを取りまとめている輸送監督がいて、その輸送監督の助手の人がポルトガル語の先生でした。

船の一番の行事は赤道祭でしたね。昔は帆船だったけど、赤道は比較的風が吹かないんですね。そして風がな

いから船が止まってしまふんですね。そういうことじゃ困るから、赤道を通るときは無事に通過できるように祈りをしようっていうことが、赤道祭の始まったきっかけだそうです。赤道祭には運動会、仮装大会、剣道大会、相撲大会などがありました。私は運動をする体質じゃなかったから参加はしなかった、ずっと見ていました。船での仕事は、夜に船の中の巡回をみんなで順番にしています。三人くらいでひと組になって、毎晩、交代していました。

私たちが乗っていた船は貨物船だったので、荷物を降ろしたり載せたりするために、いろんな港に寄りました。まずは香港、シンガポール、コロンボを通ってからインド洋を一〇日近くかけて横断しました。そしてモンバサを通ってアフリカ沿岸を南下してダーバン、ケープタウンに入港しました。そしてまたケープタウンを出港して、大西洋を一〇日くらいかけて横断しました。

立ち寄った場所の中でも特に印象に残っている場所はシンガポールですね。両親と私の三人で上陸して町を歩

いていたときに、私より少し若いくらいの黒人が私のところに来てアブラツソ（抱擁）をしてきてびっくりしましたね。シンガポールは当時イギリス領で、イギリス人にいじめられていたって言ったらかおかしけれど、イギリス人じゃない私みたいな日本人をみて安心したんでしょね。

私たちがブラジルのサントス港に着いたときは、一日もかけて大西洋を横断してきたわけですから、やっと着いたなって思いがありました。とても長い旅でしたから安心しましたね。

ブラジルの大地

ブラジルのサントス港に着いてからは収容所に入らずにすぐにパラナ州のファゼンダ（大農場）に配耕されました。移民会社が、どこその場所に行けて勝手に決めるので、自分たちの行きたいところには行けなかったですね。配耕されたそのファゼンダでは二、三年間働き

ました。日本から来てファゼンダに入ったら、一年間はそこで働く義務があるんですね。その義務が終わってから一時ばかりは、まだそこで働いていましたね。

初めてファゼンダをみたときは、あまりの土地の大きさにびっくりしました。そして私が行ったファゼンダは石山が一つもなくいいところでした。場所によっては石山がたくさんあるんですけどね。土地そのものは豊饒なものでしたよ。だけど最初に原始林を伐採して、焼き払わないといけないんですね。ファゼンダとして使うために原始林を切り開いていくんです。原始林の樹は直径一メートルくらいあって、切り倒すのがとても大変でしたよ。そうして切り開いてからやっとコーヒーを植えられるんですね。

そして普通はコーヒーを四メートル毎に植えていくんだけど、私たちのファゼンダのように土地が良いところは、それより八〇センチ広い四メートル八〇センチ毎に植えていました。広くとっている分、大きなコーヒーの樹になるんですね。コーヒーの樹が大きくなったら、樹と

樹の間がふさがってトンネルみたいになるんですね。そうして雨が降ったら地面の赤土がベタベタになってお日様の日差しも入らないから、収穫のときは地面で滑らないように歩かないといけないので大変でした。

ファゼンダで一緒に働いていた人はブラジル人でした。言葉が通じなかったんだけど、通じないものは通じないからね。通じないっていつても外国人ばかりの場所に来たんだから。しょうがないから言葉を半分真似したり、身体で手真似足真似をして意思表示をしていました。そうするとお互いだんだん勘で通じてくるんですね。

苦労したコーヒー作り

配耕されたファゼンダでの二、三年が終わってからは、ファゼンダにいたときと同じような仕事を個人的にしています。ブラジルに来て七、八年して、自分たちの土地を買ったときはうれしかったですね。そこも原始林だったから切り開くのに苦労はしたけど、自分たちの土地だっ

て思いがあつたから頑張れましたね。

コーヒーの樹に実がなるまで四年かかるので、それまでは間作をしていました。トウモロコシとか綿とか落花生などのいろんなものを、コーヒーの実がなるまでの間に作っていましたね。だからコーヒーの実ができるまでは、それを作って売って生計を立てていました。

コーヒー作りでは天候がすごく影響していました。毎年降りるわけじゃないけど、強い霜が降りてしまうとね、コーヒーの樹が大きくなっても、コーヒーの樹が寒さに弱いから、根元から焼けてしまつてダメになるんです。そうなつたらしょうがないから根元から切つて、新芽を出して実がなるまで、また四年間待つんです。その間にまた霜が降りたら、同じことを繰り返すんですね。それと長く雨が降らないときは、コーヒーの樹が乾燥してしまうんですね。ある程度大きくなっている樹は乾燥なんかには結構耐えるんですけど、霜には全然耐えられないんです。だからやっぱり私たちが一番怖いのは霜でしたね。

新聞は知識の泉

日本のことは『サンパウロ新聞』の創刊号から読んで知っていました。私がいたところにサンパウロ新聞社があつて、新聞は郵送してくれていました。日本のことが気になつて、日本のことだけを知りたいから読んでいたということではないですね。新聞はどこでも同じだけど、物事を新しく聞かせてもらつて、いろんな知識になることを得るために新聞を読ませてもらうんですね。社会情勢を知るためにですね。やはり新聞を読ませてもらえなかつたら、世界がどうなつていゝるか、どこで戦争が始まつているだとかが分からないですね。そういうことを全般的に教えてくれるのが新聞だと思ひますね。

家族は一番大事な存在です

昔はブラジルにいても、私はあくまで日本人なんだか

ら、ここは外国だつて思つていました。だけど私は何十年もブラジルに暮らさせてもらつていゝわけだから、今は外国つて感じはしらないですね。今、日本人でもブラジル国籍に帰化してゐる人が多いですけど、私は日本国籍を捨ててブラジルに帰化することはとても考えられないですね。もちろんブラジルにゐるわけだから、ブラジル国籍に変えると良いこともあるんだけど、帰化してゐなくても外国人だからといつて大きな分け隔てを感じることはないですね。ブラジルは全てがマンマンデー（慢慢的―ゆるやか）なんですね。けちけちしてゐなくて、おおざっぱだといふことですね。ブラジル人は日本だけというわけではないけど、民族的に寛大な国民性があるんですね。今、ブラジルに日本人がこんなに多いのも、国民性が良いからだと思ひますね。

ブラジルに来てからの生活をふりかえると、家族みんなが、ずつと健康で過ごせたのが良かったですね。母が盲腸で手術はしましたが、元気でした。やつぱり全然違う外国に来てしまつたんだから苦勞はありました。だけ

ど両親と私と兄と四人でブラジルに来ました。家族のおかげで苦労だと思わなかったですね。だから私にとって家族が一番大事な存在です。やっぱり有形無形において、父親というものが違いますね。実の親が実在したら幸せですよ。私はそう思いますね。今は両親と兄が同じ墓に入っているということが私の心の拠り所になっています。

生きさせてもらっていることに感謝

この老人施設ができたのは、行くところがなくなつた日本人を救済するためですね。というのも、戦争が始まってブラジルと日本との国交が断絶したんですね。そのときに私たちは迫害を受けたりしたということはないんだけど、サントスの海岸線にいたずいぶん多くの日本人たちが、ブラジル政府の命令で、居住していた場所を即時退去させられたんですね。それでそこにいた人たちが行くところがなくなってしまうんですね。そういうよ

うな困っている人たちを救済する目的でできたのが、社会福祉法人の救済会ですね。その救済会が経営しているのが、この憩いの園なんですね。

私は一九九五年に憩いの園に入所しました。大きな怪我を一回したんですけど、その怪我以外は病気の一つもせず、ずっと元気に過ごせていますね。私が入所したころは、みんな、この施設で何かしらの仕事をして手伝っていたんだけど、今は仕事がないから、何でもできることは自発的にしないとイケないと思いますね。あれをしてくれと言われなくてもね、自分からやらなくちゃいけない。足が悪くなる前は毎日、門番をしたり、草をむいたりしていました。

私は今、ここにいさせてもらって、事故で怪我をした時も助けてもらって、お世話をしてもらっているんですけど、私の心境としては、今、ここで生きさせてもらっていることに感謝の気持ちしかありません。

【聞き手の一言】

僕はブラジルにいらっしやる日系移民一世の白木國義さんにお話をうかがいました。白木さんは本当に誠実で矍鑠としていて、お話をしていくうちに、白木さんのように、自分に素直になって生きていきたいと思うようになりました。白木さんとの出会いが僕に大きな影響を与えてくれました。この作品を読んでもいただくみなさんにも、白木さんの素晴らしい人柄に触れてもらい、何か心に響くものがあればと思います。

また、この聞き書き作品を読んで、一人でも多くの方に、ブラジルでたくましく生き抜いてこられた白木さんのような日系移民がいることを知ってもらい、そして関心を持っていただければ嬉しいです。

（本来聞き書きとは、聞き手の人生を丸ごと聞き、作品にするというものです。僕が聞き書きをさせていただいた白木さんの作品では一九四〇年代半ばから一九九〇年

代半ばまでの五〇年間についての記述が欠けてしまっています。

聞き手としてこのようになったことは心残りではありますが、再度聞き取りをするのは困難で、補足ができないことをどうかご了承ください。）

蘇鉄本奎

タイトル

関西大学商学部 長谷川ゼミナール二〇一六年度聞き書き作品

ブラジル

私にとって家族が一番大切な存在

——海を渡り、土地を買って、コーヒー農園を開いた——

話し手

白木 國義さん

聞き手

蘇鉄本 奎

発行年月日

二〇一七年五月二日 発行

発行者

関西大学商学部 長谷川研究室

〒五六四-八六八〇

大阪府吹田市山手町三二二三三五

e-mail: shin@kansai-u.ac.jp

URL: <http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/shin/>

: <https://www.facebook.com/kandai.hasegawa>

©2017